

燃料補給隊(1995年3月号掲載)



地震当日の午後5時45分、垂水80(予備ポンプ車)の交替要員として長田消防署へ隊員4名と共に、広報車で出動した。途中、JR須磨駅を過ぎると、垂水とは打って変わった街の様子に胸が痛くなる。さらに、長田区に近づくと燃え盛る炎達が、我が物顔で町並みをのし歩くさまに、消防人としていたたまれない。しかし、消防の一番の武器である『水』を奪われた我々には、その炎は、あまりにも巨大で、太刀打ち出来ないが一矢報いんと気を取り直して、長田消防署に到着した。

専任の小隊長から『垂水80』は「消火活動中の消防車の燃料補給に当たれ」との署長命令を受けた。車両には軽油とガソリンの携行缶を積載しており、現在消火活動中の消防車の位置、燃料の種類の違いと今後の燃料補給の状況等申し送りを受けた。消火活動を期待していた我々には、この任務は不本意ではあったが、必要不可欠な任務と思い直して燃料補給に向かう。

最初は菅原市場前で放水中の垂水3(ポンプ車)に給油。続いて増田製粉構内で兵庫運河に部署していた北80(予備ポンプ車)に給油。そこから国道2号線を西に走り、タンク筋を経て二葉町5丁目の消防車に給油。また、加東消防本部の消防車にガソリンを給油して大橋町9丁目で京

都市消防局の消防車に、海運町で水上消防署と大阪市消防局の消防車にと給油が続く。たちまち約 200 リットルの軽油は無くなり、長田消防署へ補給に向かう。

大橋町 9 丁目の交差点を北上し、太田町の交差点に差しかかる時、須磨区大池町の妻の実家の直ぐ東側に燃え盛る炎が迫っていた。再度燃料補給に向かう中「水上消防艇から長田燃料補給隊へ」の無線が携帯無線に入る。応答するが悲しいかな通じない。直近の消防車から応答して給油に走る。予備の消防車にも車載無線が必要と痛感する。また、他都市の消防隊から「食料等の補給が無いのか」と聞かれ申し訳なく思う。消防車の燃料と同時に隊員の食料等の補給も考えなくてはと感じたが、用意されていなかった。

火災はどんどん拡大している。他都市からの応援の消防車が市道板宿線を中心に集結して、ここを決戦場と長田港から海水による複数の中継放水体制を敷く。燃料補給体制もタンクローリー1台が投入され、また、北消防団も加わって充実してきた。しかし、各補給隊間の連絡は無く、それぞれが思い思いに動き回るだけで、ときにタンクローリーから燃料補給隊の我々に「燃料補給しましょうか」といわれる。車両には燃料補給隊を示す表示やのぼりの必要性を強く感じた。

JR 以北の消防車への燃料補給をと、大橋町 9 丁目交差点を再度北上する。JR のすぐ北側は、火の粉が東側から西へ飛んでいる。その火の粉をかき潜って突っ切った。太田町交差点の手前で東側を見ると、倒壊を免れていた 2 軒の妻の実家がすでに炎の中に消えていた。

その後も車両の渋滞に巻き込まれたり、倒壊家屋や電柱に行く手を阻まれたりしながら、携行缶等による消防車への燃料補給を繰り返したが、燃料をこぼさずに上手く給油するには骨が折れた。18リットル缶は空気が入るたびにポコポコと音がして、燃料をこぼしやすく、いずれもエンジンをかけたままの給油であり、特にガソリンの給油にはとても気を遣った。幸い事故が発生せずに任務を終え、ほっとしている。また、燃料の積載量も少ないことなどから、こうした災害時は小型のタンクローリー車等の調達など、対策が必要であることを感じた。

今回、休むことなく消火活動にあたる消防隊に対して、消防車両の燃料補給は重要である。しかし、突然の大災害で燃料の調達すら確保することが困難なとき、消防署で備蓄できる量にも限界があり、緊急時の燃料調達方法も日頃から計画しておくことが大切であることを痛感した。

1月18日の午前1時前まで裏方を精一杯務めて、後任の小隊に引き継ぎ帰路についたが、燃え盛る炎は衰えることを知らず、我々は不完全燃焼のまま帰署した。